

非日常的資源利用のための戦略 — 日向灘ハマグリ碁石を事例に —

Strategy for exceptional resource use : the case of a go stone made from Hyuga Sea clamshells

李 善 愛

ハマグリ碁石は宮崎県日向市の伝統産業のひとつである。その歴史は約100年に至っている。しかし、原料となるハマグリは採りすぎによって日本国内での供給が難しく、その不足分はメキシコや東南アジアなどの海外から買い入れて補っている。また、囲碁人口も年々減っているのが現状である。そのため、関係業者はインターネットをとおして国内市場を含めて海外の碁石市場を開拓している。さらに毎年、囲碁大会を開き、囲碁への関心を呼び起こすことにも力を入れている。本稿では、日向灘のハマグリ碁石をとりあげ自然の生物体の資源化過程と、「伝統文化」の生成について歴史的な視点から考えてみたい。

キーワード：非日常的資源、資源化、伝統産業、ハマグリ、碁石

目 次

- I はじめに
- II 日向灘ハマグリ貝殻の資源化
- III 非日常的資源の持続的利用のための戦略
- IV むすびに

I はじめに

資源は、自然の状態から人間の生活のため名付けられ、植物資源、動物資源、鉱物資源、水産資源、観光資源などのように資源の性質や用途などによってさまざまな形で分類され、利用されている。このように自然の状態から資源化することは、「自然環境を文化のスタイルから選択して認識し、利用することである」（原 1989：62-78）。

資源化された資源の特徴について、秋道は次の三つに分けている。第一は、もともとだれのものでもないという無主性である。自然界にある植物や動物、あるいは鉱物、水などに最初からだれかの所有権があるわけではない。もともとだれのものでもないものを、特定の個人や集団が有益とみなし、利用してはじめて資源となる。しかも有益であるとか、役に立つという判断や価値観は時代や地域によって変わる。資源利用が文化によって大きく規定されるといわれるのはこの

ためである。第二は、何が資源であって何が資源でないのかは、文化的あるいは歴史的な条件によって変わるということである。第三は、資源自体について欠かすことのできない特徴として、更新性である。しかし、資源を獲りすぎると、その資源量はもとの状態には回復しない（秋道 1995 : 37-40）。

また、資源を利用の仕方によって、小林は次の三つに分類している。第一は、生物としての肉体を維持するのに必要なカロリーの摂取にかかわる、食糧資源である。また、カロリーや栄養とは直接関係はしないが、口に入れることで何らかの特別な効果をもたらす種類で、食糧と同様に口から体内に収めるという共通性によって薬物、毒物も含めている。第二は、日常的な生活を維持するのに必要な道具立て、装置にかかわる、材料資源である。つまり食糧資源を獲得する道具や食糧を調理する道具など、いわゆる労働用具、調理用具やそうした道具を作る工具などを作るための材料であり、雨露をしのぎ、寝起きするための建築材である。第三は、文化的装置、いわゆるソフトウェアにかかわる、象徴性資源である。第二の資源とは対照的に、そのものの形や物理的・化学的性質と直接的に関係するとは限らず、その形、あるいは味や匂いその他の性質に象徴的な意味が付与されることによって資源化される（小林 1994 : 16-17）。

しかし、小林の資源の利用の仕方による分類には、衣、食、住の日常的に用いられる資源のみ注目し、遊びのような日常的ではない場合に用いられる資源の言及は十分にされていない。

遊びは「まじめ」に対立する、自由で自発的な活動である。遊びを楽しむことは、自由を楽しむことである。これは日常の現実を越えて夢や空想に支えられる非日常的な世界をつくりだす（藪田 1998 : 8-9）。

囲碁は、人間の遊びのひとつとして非日常的な世界をつくりだすものである。碁石はそのための道具であり、ハマグリ貝殻は遊び道具の原料として用いられている。そして、ハマグリ貝殻は、「日常の現実を越えて夢や空想に支えられる非日常的な世界をつくりだす」ために選択された資源のひとつでもある。そのため、碁石の原料として用いられるハマグリ貝殻は非日常的資源のひとつとして位置付けることができると思われる。

次は日向灘のハマグリがどのような経緯で資源化していくのかについて見てみよう。

II 日向灘ハマグリ貝殻の資源化

1 ハマグリの生態

岩波国語辞典第五版によると、ハマグリとは浜の栗の意味である。その身は刺身、塩焼、フライ、煮込御飯などにして食べ、その殻は貝合わせや碁石などの原料として利用している。ゴイシハマグリの標準和名はチョウセンハマグリ (*Meretrix lamarcki*) である。

一般的にいうハマグリ (*Meretrix lusoria*) は内湾性であるのに対し、チョウセンハマグリは外洋性である。チョウセンハマグリの有名な産地は、日本の鹿島灘以南、九十九里浜、湘南、日

向灘などである（本間 1983）。

日向灘の日向市ではチョウセンハマグリのことを「スワブテハマグリ」という。「スワ」は方言で縁の部分、「ブテ」は太いといい、縁の太いハマグリという意味である（秋穂 2001：23）。

碁石の原料に用いられるハマグリ貝殻は10年以上の長寿を全うした枯貝で、その大きさが直径20cmに及ぶものである。古くは三河国・伊勢湾・常陸国の海岸が主産地であったが、現在は日向市のお倉ヶ浜が主産地となっている。

2 日向灘ハマグリ碁石のはじまり

日向のハマグリ貝殻が資源として碁石の原料に使い始められたのは、1863年、大阪日向物産取扱店にハマグリ原石が送られ、碁石の細工問屋の人が直接日向に来て確認してからである（日高 1970：246－249）。

明治初期までは三河の桑名のハマグリが碁石の原料として大阪で製造されていた。ところが、年々碁石の原料が減少し高級品の厚物が不足しはじめた頃、当時、大阪の碁石屋の番頭であった、森元次郎が大阪から今の日向市（当時の岩脇村平岩）に来て盛んに浜に出て貝殻拾いを始めた。それまでは日向の地元の人にとってハマグリ貝殻は、浜の石に等しいもので誰ひとり拾おうとしなかった。ところが、森元次郎にとっては全く金貨を拾う思いで波に打ち上げられる貝殻を拾うのであった。そして、かますに入れて大阪に送るため細島の港に運んだ。森元次郎は大阪の碁石屋の石橋小次郎の店員として働くうち、主人が越中富山の入薬屋が日向に行商に来た際、珍しい貝が浜に打ち上げられていると聞かされ、番頭を日向に遣わした。番頭が来てみると、これまで見たことのない見事なハマグリ貝殻が浜一面に足の踏み場もないくらい散らばっていた。後には人を雇って拾い、毎日の如く細島港の船便でハマグリ貝殻を大阪に送った。日向出入の玄関口である細島港は、徳川時代の日向と薩摩の一部の大名が三勤交代のために江戸に上がる、南九州唯一の港であった。明治維新を迎え益々発展し、大阪商船が定期船を回航して日向との物貨交流をしたところで、総てこの港を利用せねば日向入りはできなかった（平賀 1953：2－4）。

大阪細工問屋の人は日向の岩脇平岩の海岸に山ほど打ち寄せられたハマグリ貝殻を採取し、俵入りにして船便で細島から大阪に送り、数年の間莫大な財産を貯えた。それまで貝殻拾いの日雇い人だった地元の原山清吉という人がハマグリ貝殻の用度や価値を知り、その加工技術と販路を開拓するため、大阪で数年間碁石加工技術を学び、日向ではじめて碁石工場を作った。そして、大阪の碁石の職人小川栄次郎と共同開発したのが現在の日向ハマグリ貝殻製碁石のはじまりである。その工場に働く人々も徐々に独立して、今日の日向市のハマグリ碁石の繁栄の基となったのである。

しかし、大阪の中央市場に近い各地の海岸のハマグリが存在する間の1872年頃までは、輸送の不便などから日向のハマグリは顧みられなかった。日向碁石が市場に出荷されるようになったのは大正時代に入ってからである（日高 1970：246－249）。

日向碁石の黒石は三重県産の那智黒と呼ばれる硅質頁岩であるが、白石は主に日向市小倉ヶ浜海岸でとれるハマグリ貝殻で作られている。ハマグリは『日向地誌』（1884）によると、小倉ヶ浜に面している財光寺村の物産として記されている（平部 1976 : 777）。

最初、ハマグリ貝殻を碁石の原料として輸出していたころの規模は、宮崎県古公文書『統計材料』（1892年）によると、貝殻8俵を4円と記されている。また、1897年には貝殻82箱を246円とし、1910年には貝殻3650貫を1155円と記している。

当時の日向ハマグリ碁石の主な輸出先は大阪であった。大正時代における碁石製造は、大阪の農村において重要な副業となっていた（表1）。

表1 大正6年度（1917）大阪府東成郡の手工業戸数と工産物一覧表

品 目	製造従事戸数	生 産 量	生 産 額
管 笠	?	9, 8 4 0 個	9 8 4 円
鼻 緒	2	7, 2 0 0 足	1 8 6 円
刷 子	2	3 0 5 哥	1, 2 0 0 円
防 水 布	1	2, 0 0 0 反	3, 0 0 0 円
骨 釦	2	1, 0 3 8 哥	1, 0 3 8 円
貝 釦	5	4, 6 9 6 哥	1, 4 0 7 円
硝 子 鏡	6	2 9, 4 0 0 ?	7 3 2 円
髷	9	2 1, 6 0 0 組	1 9, 4 4 0 円
碁 盤 *	2	8 0 面	2 0 2 円
碁 石 *	2	1, 8 4 5 組	1 4, 7 6 0 円

（大阪府東成郡役所編 1923 : 765-766ページを参考に作成）

大阪府『東成郡誌』（1922）によると、「農家の副業は、碁石及び髷の製造等に過ぎず、1917年度の工業戸数は57戸で、男性149人、女性168人である。その中、碁石製造者は2戸、碁盤の製造者は2戸であるが、生産額は碁石が一番高い。碁石業は本村という農民が大阪の屎尿汲取先の碁石問屋で碁石製造法を習得し、これを村へ伝えた。1895年頃には原料供給製品販売を業とする問屋三戸を算し、囲碁の流行とともに大盛況を呈するに至る。原料白貝の普通品は常陸国鹿島郡若松村、中等品は三河国渥美郡塩切村、上等品は日向国東臼杵郡岩脇村より、同黒石は紀伊国南牟婁郡神川村より輸入する。製造者は問屋より原料の供給を受け、その製品は問屋に提供して一定の工賃を得る」とある（大阪府東成郡役所編 1923 : 765-767）。

大正時代を経て昭和時代には碁石の手工業が機械工業に代わる。一方、大阪における高級手摺り原料は日向に求めていたが、日向でも製品化されることになり、大阪への原料出荷は年々減少するばかりとなった。その結果、大阪に「碁石の手摺り工は不要の時代」を招くに至った。ところが、機械工業は碁石の最高級品から最下級品までその全部が製造されるものでなく、最高級品は依然として手摺り以外にはできないものであった。こうして、原料産地の恩恵によって日向だけに手摺り工は存在するようになった（平賀 1953：10-13）。

日向産ハマグリ貝殻が碁石の原料として選ばれた大きな理由は、厚みがあり、白く、組織が緻密で硬く、光沢があり、縞目が細かいためである（秋穂 2001：23）。

3 ハマグリ採取方法

最初は浜に転がっているハマグリ貝殻を拾うだけであったが、碁石製造が盛んになるに従い、貝殻拾いは順を追って困難になり、さまざまな採取法が工夫され、地下に埋もれた貝を掘り出さなければ一枚の原料も得られなくなった。その採取法には、ジョウレン掘り、床掘り、潜り、鉄管掘り、サンドポンプ応用採取船、貝桁網がある（平賀 1953：15-21）。

1) ジョウレン掘り採取

ジョウレン掘りは採取法が道具化された最初のものである。土工に使われているジョウレンの形を真似た道具で、柄の長さが約2メートルである。これを力にまかせて突っ込むと網になったところに貝殻がかかってくる。手ごたえによって引き上げるという方法で、同じところを円陣になって数人が交々打ち込む共同作業である。

2) 床掘り

床掘りは数十人が一団となって浜を掘る方法である。井戸掘りに等しい仕事であるが、潮汐になれば掘った穴に水が入って砂が崩れるという悪条件を工夫して一気に掘り出さなければならない。大量の貝を掘り出すということもあってこの方法は海岸に居をもつ農家の人々の農閑期の仕事として、永年にわたって行なわれている。

3) 潜り

年中の仕事として、海水が澄み切ったときには寒暑の別もなく、海中に潜って採取する。多収期は晩夏から秋で、このとき、台風が過ぎると海底に大きな変化があり、砂の高かった所が深く川条になる。その窪の底は貝殻が集まっているので、潜る人にとって暴風は福の風である。

4) 鉄管掘り

1940年に始めて試みられた方法で大体に失敗少なく多くの原料を上げている。床掘りの少し進歩した方法で、直系2メートルの鉄管を海岸に据え、砂の崩壊を喰い止めてその中の砂と水を揚げて貝を採る。

5) サンドポンプ応用採取船

1952年に始めて応用された、もっとも進歩した採取法である。

6) 貝桁網

生の貝を採取する目的で1935年に禁漁期を除く四季を通じて天候の許す限り、生貝が水揚げされ、肉だけを食膳に送り、貝殻は碁石業者の手によって貯蔵乾燥の後、碁石に製造されている。小形の桁網を引き、海深6メートル前後までの所に棲息する大形の生貝を採取している。ハマグリがとれることによって、日向市のハマグリ料理が生まれている。

農家の人は、ジョレン掘りや潜りでとったハマグリを大阪や東京に先に現金をもらって売るほどであった。戦後から増えてきた囲碁人口は1970年代から大衆化し、それによって当時は囲碁を作れば売れる時期でもあった。

4 手摺り碁石の製造過程

碁石の製造過程は、荒取り、耳摺り、磨き、艶出しの段階を経て製品となる(平賀 1953: 22-27)。

1) 荒取り

貝殻を一定の太さに切る方法で、四角を八角に、八角を十六角に切って大体の丸型ができる。このとき、如何に太い貝殻でも貝殻一枚からとれる碁石は僅かに2個である。しかもその2個のうち1個はうすもので、上等の原料となるものは1個のみである。

2) 耳摺り

荒取りした原料を碁石製造専用の耳摺り機械にかけて丸くするのが耳摺りで、原料ははじめて一定の丸型になり、できあがった碁石に大小がなく粒が揃う。

3) 面摺り

耳摺りしたものの両面を数回にわたって、少しづつ石が片輪にならないように絶えず機械の調子に合わせる、もっとも入念に手馴れた職人の手によって作りあげられる方法である。

4) 手摺り

手摺りは碁石製造中、最高の技術を要するもっとも大事な作業で、この手摺り技術によってその製造工場の優劣が決まるのである。砥石に二条または三条の溝を掘り、貝棒という木製の手摺器で1個づつ砥石にかけて摺りあげる。高級品になる程その回数は多くなり、一組の碁石を作るのに数カ月を要する。

5) 磨きあげ

磨きははじめに特殊溶液を用いて行なわれるが、その所要時間は8時間余で、第1回の磨きが終わると、2回目の水磨きに移る。この時間はまた4時間以上となっている。その間に日光を利用する乾燥も数回にわたって行なわれるが、この最後の磨きは天候に左右されるので、晴天の日を条件とする。必ず水に浸した石を日光によってよく乾燥することが、最後の艶出しに大きな影響をもたらすからである。

6) 艶出し

艶出しは袋磨によるもので、特殊艶出し用薬品が用いられる。

このような製造過程を経た碁石は、色と縞模様により、雪印、月印、花印の3種に選別される。雪印は厚みがあり、石の両面とも純白で縞目の多い最上のものである。「最高級として1980年には1000万円で売れた」ことがあり（産経新聞、1980年12月21日の朝刊）、決まった値段がないほどであった。月印は片方だけに色が残っている石で、雪印の次に位する石である。花印は石の両面に何らかの色が現れている石で、碁石としては下級品である。碁石はまた石の厚みによって50種類余に分かれている。

Ⅲ 非日常的資源の持続的利用のための戦略

1 碁石の原料の変化

現在、碁石に使われている原料には、硬質ガラス、プラスチック、貝殻（ハマグリ、シャコガイ、白蝶貝）、象牙、瑠璃、玉、ヒスイなどがある。増川によると、日本で一番古い碁石は正倉院蔵のもので、一組は象牙製の紅と紺であり、別の碁石は黒と白で、黒石は橄欖岩、白石は硬玉製であるという（増川 1996：3）。

碁石に関する史料は少なく、姫路御着城遺跡から出土した16世紀前半の碁石があるくらいである。近世になると、各地で碁石の生産が急速に広まり、『毛吹草』（1645）には、摂津、三河、若狭、石見、長門、紀伊、豊後、肥後と8つの地方の碁石がとりあげられている。また、『雍州府志』（1686）にも紀伊の海浜でとれた黒石、白石を碁石に使い、白は貝を黒は石を磨いて作ったと記してある。18世紀後半の『倭訓栞』には紀伊の黒石を那智黒といい、豊後佐賀と長門国の海浜でも黒石、白石がとれると記している。「白石は海蛤を磨琢して造る」とあるので（増川 1996：187）、ハマグリ貝殻からの碁石製造は遅くとも17世紀後半までさかのぼることができる。

大阪の青木商店（注1）によると、ハマグリ碁石以外に、碁石の原料には1955年までは、黒石に玄昌岩（宮城県；瓦の代わり、建材としてつかわれる）を使ったが、玄昌岩は柔らかく割れ易かったという。その他に竹も白石、黒石に使われていたが、1940年には堺市の池下碁石製造所が硬質ガラス製碁石を作り出しはじめた。戦後からは偽物の真珠ボタン作りの技術を応用したプラスチック製碁石が作られた。このような碁石原料の変化の背景は、戦後、マスコミの影響により囲碁人口が増し、碁石が爆発的に売出したためである。1992年からは従来の白、黒色の硬質ガラス製碁石が緑、紅色までも生産されている。

日向産ハマグリ碁石は1970年代まで決まった値段がないほど高く売れていた。しかし、1980年代にメキシコからハマグリ貝殻が輸入され碁石の値段が安くなり、人工碁石原料が安くて大量に生産され、日向産ハマグリ碁石の販売量は激減する。さらに、さまざまなレジャーやスポーツ、

不景気などの影響により、囲碁人口の数も減って高齢化しつつある。

そして、現在は人工原料で作られた安い碁石と競い合うため、日向でしか作れないハマグリ碁石は高級品として生き残り策を考えている。一方では、日向のハマグリ碁石を伝統産業として国から認めてもらうよう働きかけており、毎年、国内外の囲碁名人を招いたり、一般地域住民が参加したりする碁石大会を開いている。

2 外国からの碁石原料の輸入

日向市は乱獲によるハマグリの枯渇を防ぐため禁漁期をもうけており、漁期は12月から2月までの3ヶ月間としている。漁業組合員は20人ほどいるが、ハマグリ漁はその漁業組合からの漁業許可をもらった漁業組合員に限られている。とくにハマグリ貝殻をとる許可は、ハマグリ漁と別にもうけており、ハマグリ貝殻採取者は漁業権行使料として1人あたり年間10万円を払っている。

1917年から始まった日向碁石工場は現在、8カ所が残っており、各々下請けあるいは独立して碁石をつくっている。1973年から1975年までの最盛期には、従業員数を50人前後に雇うほどの規模であったが、現在は、3社は夫婦で、1社は1人でパートとして働いている。

碁石の生産と販売を兼ねている日向の黒木商店は、1代目が大阪の森元次郎という人の下で働きながら碁石加工技術を覚え、3代目までに至っている。現在、碁石を作る人は8人で、そのうち、男子が4人で50代3人、40代1人であり、女子4人はパートで働いている。

碁石の原料は、1966年、1967年頃メキシコ産のハマグリ貝殻製が日向産として、あるいは日向産と混ざって高い値段で売られていた。しかし、日向産の貝殻がとれなくなり、碁石の需要が増えたため、メキシコ産のハマグリ貝殻を商社をとおして仕入れなければならなくなった。しかし、商社を通じてハマグリ貝殻を買うと、碁石生産者が希望する条件が商社に正確に伝わらない、原料としてよい貝殻が入って来ないという不便があった。そのため、黒木商店は1970年代に直接メキシコに渡ってハマグリ貝殻産地を開拓することにした。

開拓のときは最初、アメリカに行き、大学時代の友達などの知り合いから情報を聞き、電話帳を調べて日系人らしいと思ったところに片っ端から電話を入れた。その中で、メキシコのエンセナーダに住んでいる日本人1世のパートナーを見つけた。エンセナーダの工場には日本人1世やその家族が住んでいる。日本人1世は、伊豆の下田出身で75歳の男性である。アワビを専門にとる海士としてメキシコに渡り、メキシコ女性と結婚してそのまま住み着いている。

エンセナーダは漁業しか仕事がなく、地元の女子達が多少の小遣い稼ぎとして工場ではハマグリ貝殻のくりぬきや貝を拾い集める仕事をしている。最初はメキシコでの碁石生産を考えて日本人1世の息子を日向に1年間住ませながら碁石加工技術を教えた。しかし、碁石の手摺り技術は日本人技術者におよばず、碁石製造過程の荒取りとして貝殻のくりぬき作業のみ頼んでいる。貝殻加工の機械はダイヤモンドドリル、ベアリングなどの部品まで全て黒木商店が提供している。

しかし、エンセナーダのハマグリ貝殻もとれる量が少なくなり、現在は、カリフォルニア半島

の南端に位置するブタプリエーターという町までハマグリ貝殻の採取地を広げている。日本人1世は、海岸に打ち上げられたハマグリ貝殻を拾う人を雇い、小屋をつくってそこに雇い人を住まわせ、2日に1回くらいトラックで貝殻回収に回っている。ブタプリエーターは、40戸数ほどの小さい漁村である。男子は潜ってアワビをとったり伊勢エビをかごでとったりしている。

黒木商店はメキシコから直接輸入したハマグリ貝殻を日向市の同業者に売り、加工した碁石は大阪や東京の碁石問屋に卸している。また、直営している店には碁石や碁盤とともに、ハマグリ貝殻で作ったペンダント、ネックレスなどを売り、ハマグリ専門の食堂も経営している。

3 インターネットによる市場開拓

インターネット囲碁データベースによると、1995年現在、世界の囲碁人口は約2400万人である（表2）。その中で囲碁人口がもっとも多い地域はアジアで、世界囲碁人口の約99%を占めている（図1）。

表2 世界の囲碁人口（単位：人）

国名	人数	国名	人数
アジア	23,712,000	西欧	149,500
北米	127	オセアニア	4,000
東欧	119,000	中南米	30,080
アフリカ	40	中近東	300

（インターネット囲碁データベース 1995年を参考に作成）

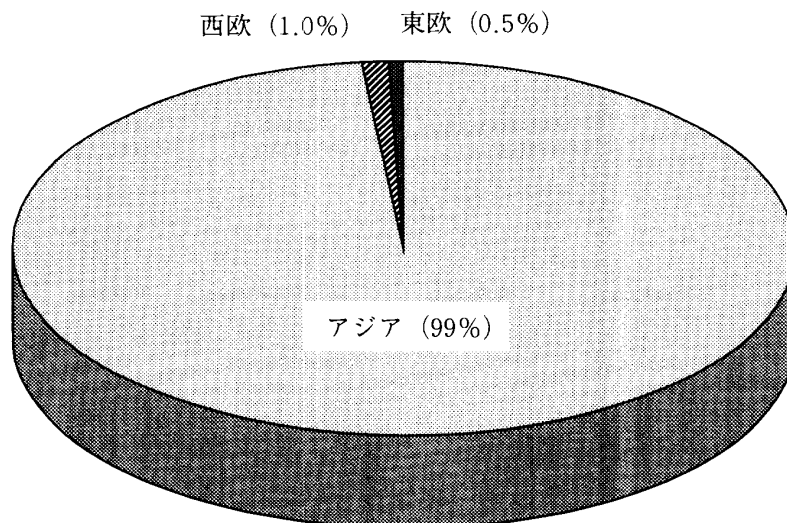


図1 世界の地域別囲碁人口の割合

アジアにおける囲碁人口は中国がもっとも多く約1000万人で、アジアの囲碁総人口の約43%を占めている。次ぎは韓国で約39%を占めており、その次ぎは日本で、アジア総囲碁人口の約18%を占めている（図2）。

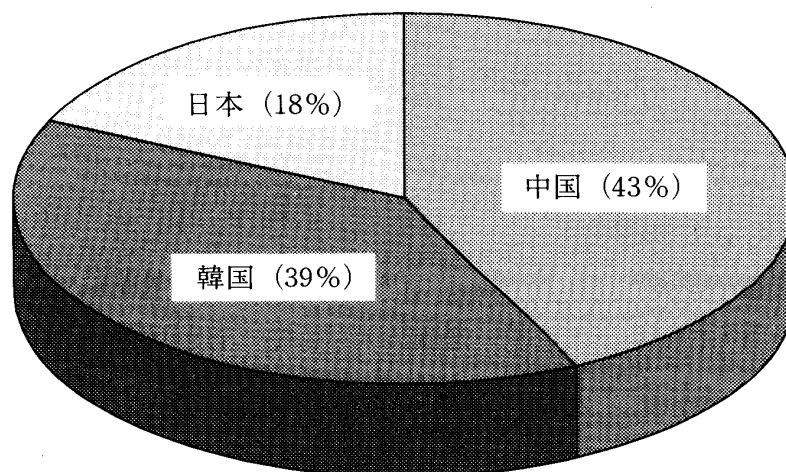


図2 アジアの国別囲碁人口の割合

表3 アジアの囲碁人口（単位：千人）

国名	総人口数（年度）A	囲碁人口数B	割合（A/B）
中国	1,130,511（1990）	10,000	0.88%
台湾	？	600	—
韓国	44,851（1995）	9,000	20.07%
日本	125,570（1995）	4,100	3.27%
北朝鮮	20,522（1993）	2	0.01%
タイ	59,396（1994）	10	0.02%
合計	1,380,850	23,712	1.64%

（インターネット囲碁データベース 1995年を参考に作成）

しかし、国別総人口の中で占める囲碁人口の割合は、韓国がもっとも高く総人口の約20%を占めている。その次は日本、中国の順である（表3）。日本における囲碁の愛好者は60代が7割以上を占めている。

黒木商店は日本国内における囲碁人口の減少や高齢化により、独自の市場開拓のため、インター

ネット上にホームページをつくり、香港、台湾などからメールで直接基石の注文を受けている。また、囲碁人口がもっとも多い韓国とは大阪や東京の間屋をとおさず、直接取り引きできる市場開拓も試みている。

IV むすびに

囲碁は中国から日本に伝わって約10世紀の間、遊び継がれてきている。その間の日本の囲碁のあり方について概観してみると、以下のとおりである。

中世には宮廷の女官や尼僧など、女性の囲碁愛好家が多かったが、近世には都市住民や官僚化した武士、農村の富裕層などの人々が囲碁を楽しむようになり、このような囲碁の普及とともに職業的な囲碁打ちも誕生した。明治時代からはすべての人々が囲碁を楽しめる社会的基盤が整い、大正時代には高尚な遊びとしてのイメージが定着するまでに至った（増川 1996：332-334）。第二次世界大戦後はマスコミの影響で囲碁人口は激増したが、その後の多様化したレジャーとスポーツにより、囲碁人口は現在、高齢化と少数化を迎えている。

このような囲碁のあり方の中で、日向のハマグリ貝殻製基石は明治時代に富山の薬屋の発見をきっかけにより、単なる貝殻から資源としての価値が与えられるようになった。また、ハマグリ貝殻の資源化は、日向の地域文化形成に及ぼす影響も大きかった。たとえば、日向のハマグリ貝殻は基石の原料として使われるだけでなく、同時に貝殻のさまざまな採取技術や基石としての加工技術も発達させた。そのうえ、ハマグリ煮炊き御飯のような日向の郷土料理まで誕生し、そしてハマグリをめぐる日向独特のローカル文化を形成している。さらに、観光資源としての「伝統文化」を作り出そうとしている。

しかし、囲碁人口の激減や基石原料の減少と平行して、値段の安い人工原料でつくられた基石が大量に生産されている。その中で非日常的資源としてのハマグリ貝殻基石の先行きは非常に不透明であるが、日向のローカル文化を維持していくためさまざまな戦略が行われている。たとえば、囲碁人口の確保のため、年中行事として囲碁大会を開き、囲碁人口の確保と伝統産業としての技術保全をはかっている。また、原料確保のためには海外から安定した原料供給源の確保とハマグリ漁の漁期と、とる人の制限を行っている。さらに、インターネットを利用して海外の市場開拓にも目を向け、日向しか存在しない手摺り匠人がつくった自然のハマグリ貝殻製のブランド製品であることを世界にアピールしている。

日向のハマグリ貝殻製基石生産と、原料購入先であるメキシコの地元民とのかかわりなどについては今後の研究課題としたい。

注

- (1) 青木商店は、戦前までは京都の東山近くでトランプ、花蓋を製造し、サハリンまで販売しに行った。戦後は大阪に引き上げ、取引していたトランプ、花蓋を売りながら碁盤、碁筒、碁石の全国販売もした。その当時はモノが足りなく、何でも作ったら売れる時代であったという。

補記

本稿における2000年4月から2001年3月までの現地調査は、宮崎学術振興財団から研究助成をうけて行ったものである。調査の際には日向市商工観光課、黒木碁石、青木商店などさまざまな方々にお世話になった。この場をかりて感謝の意をあらわしたい。

参考・引用文献

秋道智彌

1995 『なわばりの文化史』 小学館。

秋穂 淳

2001 「日向の逸品 ハマグリ碁石と榎碁盤」『アルカス』14-2：22-26、日本エアシステム。

大阪府東成郡役所編

1923 『東成郡誌』 大阪府東成郡役所。

小林達雄

1994 「縄文文化における資源の認知と利用」大塚柳太郎編『講座地球に生きる3 資源への文化適応』：15-46、雄山閣。

嶋根克己・藤村正之

2001 『非日常を生み出す文化装置』 北樹出版。

藪田碩哉

1998 (1996) 『遊びの文化論』 遊戯社。

伝統的工芸品産業振興協会編

1980 『伝統的工芸品技術事典』 三和印刷。

原ひろ子

1989 『ヘヤーインディアンとその世界』 平凡社。

林 裕

1993 『爛柯堂棋話1』 平凡社。

東臼杵郡富高町役場

1922 『町治要綱』 東臼杵郡富高町役場。

日高七郎

1970 『日向烏鷺談叢』 藤屋写真印刷社。

平部嶺南

1976 『日向地誌』 青潮社。

平賀儀雄

1953 『はまぐり物語』。

本間三郎

1983 『学研生物図鑑 貝Ⅱ』 学習研究社。

増川宏市

1996 『ものと人間の文化史59 碁』 法政大学出版局。

宮崎県古公文書

1892 『統計材料』 2 宮崎県。

宮崎県古公文書

1897 『統計材料』 3 宮崎県。

宮崎県古公文書

1900 『統計材料』 1 宮崎県。

宮崎県古公文書

1911 『統計材料』 2 宮崎県。

<http://www2m.biglobe.ne.jp/~funatsu/vpopj.htm>